





宗門葛藤集

全二冊合壹本

古人ノ機縁葛藤ヲ舉ゲ參禪學道ノ要路ヲ述ブ禪林必用ノ書ナリ然ルニ版本廢失シテ行本甚タ少レリ四方ノ禪德騰寫ノ勞ヲ愁ヘ亥豕ノ謬リヲ傷ム茲ニ玄猷惠照惠範玄令四禪士深ク憤願ヲ發シ諸方ノ尊宿ニ談議シ舊刻ノ謬リヲ訂正シ又類則異同ヲ格上ニ舉ゲ尚數則ヲ卷末ニ附録シ初テ此書ノ大成ヲ見ル弊店諸師ノ勸勵ニヨツテ資財ノ欠ヲ喜捨シ遂ニ成本ヲ弘通ス今又大意ヲ以テ諸方ノ高士ニ報ズト云ル  
安政六歲次巳未春 京師六角通寺町西 禪林書房 柳枝軒方行敬白



夜船閑話序

神田旗本町壹丁目拾壹番地

三河屋三郎

窮乏菴主饑凍選

審曆丁丑の春長安の書肆松月堂の末と名

同丁遠く草書な裁して吾が鶴林近侍の

左右小寄せそ云く伏して兼は老師乃古紙

堆中夜船閑話と名えは草稿あり書中

多く氣分鍊て精な養ひ人の管衛として

充てぬを長生久視の秘訣な取承む

夜公閑話序





謂ゆは神伝鍊丹の至要ありと是故に世の  
好むの君子是をとりて復荒旱の雲霓に  
水一偶く雲水の徒侶竊かに傳寫し來は  
あるも秘重し秘藏して人おいて見せぬ  
天瓢むかしく櫃におさめて匿しゝる如く  
願くは是は梓に壽ぐゝていてを獨に慰  
せん固く老師常小人を利するが以て老  
を樂しみな人と若ま人に利ある師豈



に是を吝しみならんやと二虎含み來て師に  
を師微くとして笑ふ也小おいて諸子舊書櫃  
は固く草稿蠹魚の腹中に藏らる者中系  
ふるより諸子仰ら訂正傳寫して既に十來  
紙は見は仰ら封裏していて京師に寄せん  
とて市に馬齒一日も諸子小長くはなれず  
端中は書せん復は責むるも亦辭せざして  
去に之く師鶴林に復する事大凡四十年鉢



囊公掛けしよりい來雲水參玄の布衲子終  
る小門圃に跨ぎて師の毒涎を耳かひ痛棒公  
滋しと志を辭し去る度と忘る者或は十年或は  
二十年枯林下の塵と成事と亦終に顧みざる  
底ありと盡く是も叢林の頭角四方の精英あり  
各く西東みたりるふかきとく舊舎癯宅  
老院破廟借ていり菴居のまゝして清苦と  
朝艱辛晝饑夜凍はく投とる者も菜葉

麦數耳に觸る者も熱喝垢罵骨に徹とる  
者も唾拳痛棒見る者も頼と攢め同者肌  
汗と鬼神も油と涙と浮へはるく癩外も  
油と掌公合せりべしと初め来る時宋玉  
河晏が義白ありて肌膚光澤凝とる膏乃  
めくろろ者も久しうて恰も杜甫賈嶋  
の形容枯朽顔色憔悴とるが如く或は居子に  
澤畔小蓬ふかきと參玄軀命の顧みず底



の勇猛の上士にあつてさうする人への樂しみ  
有てう斤時も漢泊とて復を得んや是故に  
付くに参窮度にてこそ清苦節を失する族  
へ肺金いふみかじも水を枯渇して病癰塊  
痛難治の重症を發せんとは是れ憐み是  
を愁く所な縁の色ある者連日乍ら忍後  
不禁にして雲頭を按いてを便の臭乳を  
絞つて是に授るふ内觀の秘訣なして乃ひ

多く若是參禪辯道の工士心火逆上し身を勞  
瘁し五内稠雑せざる事あり人に鍼灸藥乃  
之はなして是れ治せんと欲せば經ひ義陀扁  
倉とて多くも輒く救ひ得る事能はざりしか  
他人還丹の秘訣あり修め事々々秘小是れ  
修すも奇功を見ざる復雲霧を披ひて皎日  
見ざるも人若し此秘要を修せんと欲せば  
且く工を施下し結頭を拈放し先







要勞役等の諸症底を拂て平癒せどんば  
を傍う頭を切てねらるゝ世において諸子教存  
化して密くに精修を名く悉くと思儀  
の奇功と見ふ功の速速に進修し精廉に依  
とてども大なる全快に名く内親の奇功と  
續嘆志て休む師の曰く休む事を病全快  
とてていふは是なりととる度なるを轉、治  
せは轉く参ぜよ轉く悟らば轉く進め老傍

初め参学の時難治の重病を發して是憂  
苦諸子小十倍せり進退難谷はるるをふひ  
そうふ思惟とてて生れて此憂愁に沈むん  
よりふめりトて死しては革囊を捨んよは  
と何の業も此の内親の秘訣ははてしなく  
全快を得る事今この諸子乃め一至今のそく  
此は是神仏長生不死の神術なり中下は世  
来たる百歳あるを一とて餘は計り定むる



らび予則ち執喜小信へと精修意を盡る者  
大凡二十年心身は才に健康小氣力才小勇  
壯なるを賢ふ此において市を祿て少く竊  
く不謂くらく縦ひ世を終ふ修し得て彭祖  
が八百の歳時分保ち得るも唯是一箇種を  
無智の守屍鬼あゝくのと老狸の舊窠小  
睡るがゆゑ終小壊滅に歸せん何故ぞ今既  
に獨りも葛洪秘授張義費張が輩らふ

見ればわづかに弘の大誓を憤起し菩提の  
威儀を學びあふ大法施をりし虚空小先  
つて死すべし虚を後にてけをさる底の不  
退堅固の眞法身をお殺し金剛不壊乃  
大仙身を成就せんといふに世においてま正參  
まの上士あゝ軍をわく肉親と參禪と共  
に合せ並べ貯て且の耕し且の戦ふと  
盡し茲に二十年年と一負と添へ二肩



と増し得く今既に二百衆に迫りて中乃  
方米の納子芳居疲倦の族々或は心火逆  
上し正に發せんとする底を憐み密かに  
此内親の至要な傳授し之所に快癒せし  
め轉々悟は轉々進歩しむ馬年と果古稀  
に就くころと云ふとも少張の病患あり齒  
牙全く揺落せし眼耳次第に分りゆく  
初よりこれ變遷を忘る毎月お度乃法施

終に怠倦せし終に佗方に應じて二百八十乃  
海衆と衆會して或は又旬七旬を経る縁に  
雲水の希望小照く胡祝乱乃と云ふ大凡  
六十會に及ぶと云ふも終に一日も罷能編  
斎が損さる身は健康を力に次第小二三  
十歳の時より遙かに勝るなり是皆彼の内  
親の奇功に依る事な費ふ佗菴の諸子各  
く悲泣化禱して云く吾が師大慈大悲願



くは内親の大畧を書せよと書きてぬめくね  
来禪病疲倦を軍の如く者を救へ所吊ら  
領と云ふに系統なる神中の神く云ふ  
曰く大凡は中より長来を保川の要形に  
練るに志るに形を練るの要神氣なり  
丹田氣海のる小凝らるる小なり神凝る  
則ち氣聚るるる則ち吊ら直丹なる丹来る  
則ち氣固る則ち神全る神全る則ち

来るる是は人九轉還丹の秘訣に契へし須  
らく知るるる丹の果して外お小非なる  
と子萬唯心火の降下る氣海丹田乃る  
光るる小なりるるのるは菴の緒子此  
を要ふ勤めたるげみ進んでるるる禪  
病を治るる勞疲を救ふのるにわくは禪門向  
上の要に到て年来凝固わむ人といふ  
と拍して大笑する底の大歡喜なり



何故そ月をうて城郭盡く

惟時密曆 丁丑孟正廿八日

窮乏菴主飢凍煇香禱首

夜船閑話

山跡初め冬學の日誓川て勇猛の信心を  
憤發し不退の道情を激起し難鍊刻苦  
とて若既小ぬる事乍ち一夜忽ちして  
落第とて徒米多々の難越ぬるおと氷  
融し曠初生死の業根底不徹して還滅と  
自覚く道ち人となるは是に遠くは  
古へ三二十年是等の程候とて此後難ん



忘々者數月向後日用と廻顧とるふ物事の  
二境全く調和せしむる終るまで延びて  
あつて自ら謂はく極く精進を著る重て  
一回捨念し去んて蘇りて牙冥を咬定し  
雙眼を睜開し寢食とも小瘳せんことを  
既にして未だ期月小耳さるる心火逆上し  
肺金焦枯して雙脚氷霜の底小浸とらぬ  
くは耳漢をのるは乃くかや肝膽を小

怯弱しして舉措恐怖多く心忪困倦し寐  
寢撞くの境界を見れば腋を汗ばせし  
み眼を涙を帯びしおいて遍く明解し  
授け廣く名醫を採ると云へども百薬す  
功なく或人曰く城の白河乃ち裏に巖居  
する者あり在人是と名あて白歯先生と  
云ふ靈壽に己甲子年園を一人居に里  
程を隔て人を見れば又は好めと云く則は



必とて避く人そ賢愚を辨とるるなり  
里人東に称して仙人と云ふ故の丈山氏  
の師範として精く大文に通じ深く醫道  
小達と人あり終てそして洛陽と云ふ別は稀  
きに微言を吐く返ひて是を考ふよ大いに  
人小利ありといふ小おわく雲永芳七 庚寅  
孟正中浣竊く小行纏ひ着け濃東に發し  
思ふ公然へ直ち小白川の邑に到り包を茶

店小おわくしと函の巖栖のまをるぬ里人遙に  
に一枝の溪水に指と云ふち彼のものを夢にほて  
遙かに山溪小入は正よゆく夏里と云ふ小作  
ち流ある蹄断と雄往と云ふか一時一  
をまわり遙く小雲煙のりか指と黄白ふ  
て方す餘る者あると山氣にほて或は所と  
或は隠る是函の洞に小壘下と云ふ所の蘆簾  
さりと不昂ち裳を褰けて上げ巖出巖に翳



み蒙茸と披け氷雪草鞋と咬と雲露納  
夜を歷と辛汗と滴と苦膏と流して漸く  
彼の苦屋のまに到とは風致絶美にお  
衣に下くくろくを覺る心泥震し忍じ肌  
膚戰栗に且く巖根に倚て數息する  
者數百少者あつて衣を披ひ襟を正しく  
畏れく鞠躬して童子の中をゆるる朦朧  
として幽る目と収めて端中をゆるる蒼髮

垂て膝に到て朱顏麗くして棗のぬし大布  
乃袍を掛け鞆草の席に坐せると窟中後々に  
方みふ笏ふして全く資具を具を机上  
只中庸と老子と金剛般若とを置く予  
則ち禮と盡して若る病固を告げ其の救  
ひを請ふ少者幽眼を穿ひて熟く視て徠く  
として告げて曰くおは是と中坐死の陳人  
據案を拾く食ひ糜糜に付はく睡はけ



外更に何なるか人々月々愧に遠く上人の  
来りて其骨より其を予りち轉々啓叩く  
休むに時ふ幽恬めくして予が心を捉へて精  
しく五内を窺ひた僕を察と凡甲長くことす  
す修平くして顔と損めてはあて云く已哉觀理  
座す過と進修節は失くして終小世の重症な  
るをいふに醫治し難き者いふの禪病なり  
若く鍼灸藥のこつ乃あは時んで而して法

に是を救うんと欲せば扁倉力を尽く華陀  
頼と損むるも奇功を見たり其能くして今既  
小觀理のお小破らば勤めて肉觀の功を積ま  
ざるに終に起は其能くして是は力の起倒は必  
らば地に依るの謂なり予が曰く精しく肉  
觀の要秘をばうん學びてく小足を修せん  
幽素くいふくして容かあくくめ從容くく  
盡て曰く嗚呼その必るは同くを好む乃士



ありて、心が背に回けるをいって微しくなり  
若んは是を養生の秘訣ふして人の知る事稀  
と云りあるとん必に奇功を見ん視又  
期しはて一丈大道分とてくお儀あり陰陽  
交和して人物の元氣中間小黙運  
して五臟列で經脈のりる衛氣營血互に昇  
降循環する若し晝夜に六九五十度肺金ハ北  
藏して膈上に浮び肝木ハ牡藏して膈

下に沈む心火ハ太陽にして上部に位ひ  
腎水ハ太陰にして下部を占む入膈七升あり  
脾胃各く二升ハ藏くと呼心脈より出て  
吸ハ腎肝に入る一呼一吸のりく復二寸一吸に  
脈乃行く復二寸晝夜に一萬二千六百の氣  
息あり脈一身を巡行するの五十次火ハ軒  
浮に志ては孫小騰昇を好む水ハ沈重ふして  
常ふ下流ハ務む若人察せに觀照或ハ邪



と失し志念或は度にさるは心火熾衝し  
て肺金焦薄と金母苦さむ則ち水子衰減  
と母子互に疲傷して五位困倦し六属凌棄  
に四大増損して各々百一乃病を生じ百藥  
功を立とるを能はざと衆醫総にもふ薬を採  
て終ふ者るをよるに到る蓋し是れ害を爲す  
國にちるが如し明君聖主は是れをふたす  
ふし睦君庸主は是れをふたす上ふたに上り

恣ふとる則ち九卿權に終つて百僚窮を恃んで  
て民の窮困を顧みずと一孫ふ菜色多く  
國餓莩多く一賢良瀆み竄れ民瞋り恨む  
諸侯離れ叛き衆夷黷ひ起つて終ふ民庶を  
塗炭に一國脉永く断絶とるふ到れん  
下に導くふとる則ち九卿位を失つて百僚  
勤めて是れ民の勞疲を忘るるを忘るる  
に餘は人の粟あり婦ふ餘は人の布あり群



賢者より属し諸侯忍と服して民肥（國強く  
今に遠きもの悉民かく境ひを侵さる敵國  
か一國斗の智をばくばく民戈戦乃  
をな知くば人身もはと終る至人の常なり  
を氣かして下に充てしむ心氣下に充てし  
則ち凶内小勅く復かく四邪海と外より  
竊るの能はざる營衛充ち心神健るるにち  
終小藥餌の耳破ふ知くば身終に鍼灸の

痛痒と受けど庸流は常に心をたして上に  
怒小と上小怒にさる則ちたすの火右すの金を  
刺して五官縮まり疲と六觀苦るし一み暇む  
是故に漆園曰く真人の息は是と息さるに  
雖といて一衆人の息は是と息さる小喉を  
以ては許後がよく盡し一息下焦に在る則ち  
息遠く氣上焦に在る則ち息健はる  
上陽子が曰く人に真一の氣有るは丹田乃中



に降下とる則ハ一陽はと復と若人始陽初復  
の候が如くむと秋せば暖氣はて是が信と  
とる一太九生は書人の乃上部は常より  
清涼さるん夏を要し下部は小温煖か  
らん夏は要す又經脈の十二は支の十二に  
配し月の十二に應下時の十二に合と云々復  
化再周して一歳を全ふとるが如く一五陰上  
小居一陽下を占む是を地雷復と云ふ

冬至の候より真人の息は是は息とる小  
を以てとるの謂ふ二陽下に位ひ一陰上小居に  
是は地天泰と云ふ蓋正の候より萬物發生  
の氣は含んで百卉萌化の澤と云く至人元  
を占めて下小充と云ふの象人息を得は  
則ハ營衛充美し氣力常壯とる五陰下  
居一陽上に止はる是は天地剝といふ九月  
の候より大是は得る則ハ林苑色は冬より而



奇荒落と足衆人の息と是と息とる小味を  
ひてよるの象人はふ得る則に形容枯槁  
齒牙揺る落は所以小延壽書に云く六陽  
共盡く則是全陰の人死し易とて須らく  
知るべし元氣を以て常に下小充しむ是生  
成を極要とるるを昔し呉契初石室  
先生小見し齋戒して鍊丹の術を習ふ先  
生の云く永小元玄真丹の神祕ありよとの

器にありさるるんは得く得るるに古く  
黄朱子是ふひて黄帝に傳ふ帝七齋戒して  
是を多くす大道の外小玄丹多くす玄丹乃外  
小大道なり蓋し五無漏の法あり你らの六欲を  
を五官各く其職を忘る則に混然たる本源  
の真氣彷彿として目前に充つ是彼乃大白  
道人の謂ゆは我がたふひて変はるの大小合  
する者なり孟軻氏の謂ゆは浩然の氣是を



ひこいて肺輪氣海丹田の間に藏めて歲月を  
守りて是を守る一ふくをて是を守るを  
適ふくをて一朝乍ら丹竈を掀翻する則に  
内外中る八紘四維總是一枚の大還丹は時ふ  
あつて初て自己死ちて大地に生つて生ぜに  
あつては死して死せざる底の真箇長生久  
視の大神化するものと實得するものと真正丹  
竈功なる底の時節とに豈に凡ふ御一霞

小蹲ぐる地を締め水を弱む等の類なる幻変  
ないて懐とて有る者やんや大洋を攪ひて酥  
酪とて有る者やんや黄金とて有る者やんや  
は丹田あり液は肺液あり肺液をいへば丹田  
還へば是故に金液還丹といふ事なく僅ん  
で金丹といはれ且く神觀を極下へ努め力  
めて治るないて期とせん者やんや李士玄が  
謂ゆる清降に偏する者にあつてやんや一



まふ割では血或いは滞碍するやうなむら  
幽微くして笑てよく然るに李氏いふや  
火の性は炎上より宜しく是なるもむ  
るゝ水の性は下より小就く宜しく是なる  
して上よりむるゝ水上で火下は是なるを  
交とてふ交は則ち既済とて交らざる則ち  
未済とて交は生の象不交は死の象あり  
李家が謂ゆる清降に偏ありとて丹溪が

學者の弊を救ふんとする古人よく相火上を  
易とて身中の苦痛むるもふ補ふ火を割  
とては火より益火に君相の二義あり君  
火の上に居て静とてまこと相火は下より  
して動ははるる君火は是一心乃ちまなり  
相火は寧補とて益火相火小を股あり謂  
ゆる腎と肝とより肝は雷に比し腎は龍に  
比して是故にち龍として海底に居せしめ



必と迅發の雷なるべし雷として澤中に  
藏せしめ必に飛騰の龍なる海に澤の水  
わづばとさふ復かゝる是相火より易さる割  
とるの終にあつて又曰く心勞煩とる則は  
虚して心熱に心虚とる則は是を補とさふ  
心虚とていて腎に交ひ是を補とさふ既  
海の道あり公先ふ心火遂上して世重病に  
發に若し心火降下せどもんは緩ひ二界乃

秘密を行し盡しつて元氣未だ且つ又  
未だ形く模道家者流に教とるんはて大いふ  
釋に吳なる者ととるは是禪か他日おきせ  
は大いふ哭はぬたの意有るむは觀はを觀は  
いて正觀とるを觀乃老を邪觀とる向とる  
公多觀をいて世重症に見ゆ今是を救ふに  
を觀をいてはゆと可さるる公若し心火  
意火を収めて丹田及び足心のるふおは胸



瞞自然に清涼にして一點の計較と想なく一  
滴の識浪清波なくんも真觀湛湛觀なるを  
そふ変かるともあらずく禪觀を枕下せんと  
佛の言へくんは足んふおさめて能く百一乃  
病を治とと阿含に酥を用はの法ありをの  
勞疲を救ふ変を妙なり天名の摩訶止觀  
に病因を緣とる変甚と盡すり法法を説く  
変も亦甚と精密あり十二種の息ありとよく

死病を治に脇を縁して変ふを見る乃法  
ありそ大定心火を降下して丹田及び足んよ  
収るんいて至要とに但病を治とるのふあ  
はちひに禪觀を助とく盡く繫縁縁其の  
二止ある禪其の實相の因觀繫縁は心氣を  
脇脇を丹田のるに収め守るんは第一  
とに乃者是は用るにちひふ利あり古く  
永平の開祖師大宋に入て此法を天臺より



おに師一日密室に入て益々精々入條曰く元  
子坐禪の時さんたの掌の上にたてゐると  
是即ち顛師の謂はく繫縁止の大畧あり  
顛師初め此の繫縁内觀の秘訣を教へてそ  
家兄鎮法王病を萬死の中に助け救ひと  
しふまゝ精々くは小止觀の中に説けるまゝ  
白雲和尚曰くおつねに心して七腔子の中に  
充てゝむ徒に區々衆に領々賓に接々

機に應々及び小參普說七縱八橫のるふおいく  
是が用ひてはくまふかゝ老來殊に利益多と  
まふ覺々と寔にやふなゝ是蓋々素同  
みゆは恬澹虚無といひ真氣足にあらう  
精神内に守るゝ病何とよりあゝむといふ終  
に本つた人者あゝむ且つ其内に守るの  
要え氣として一身の中に充塞せしむる百  
六十の骨節八萬四千の毛竅一毫髪をとりも



欠缺のまかりくくめんまふ要にこれ生ふ  
者ふ至要なるものなり彭祖曰く和神  
道氣の法當る小深く密室を鎖ぎし牀に  
案し席を暖め枕のするをこす正身偃卧  
し瞑目して心氣を胸膈の中に閉ぎし鴻毛に  
して鼻上につく動くるもの二百息を行く  
耳閉まかく目見ざるまかく形のゆるくうは  
別は寒暑も侵らんとま能はに蜂萬も毒する

ま能はに毒た二百六十歳足真人にをうと  
又籟山籟曰く已に飢て方に食し未だ飽に  
して先止む散步逍遙して務めて腹をて空  
かしく腹の空る時に當て仰ち静室に入  
り端坐然して出入の息を數へよ一息より  
かそへて十ふ到り十より數へて百に至り百か  
數へ終るまでふに至りては身元然として  
心寂然とるま虚空と号し形乃ごやく



ありのくくへて一息おのほく止はか出でん  
入らざる時此息八萬四千の毛孔の中より雲  
蒸し霧起はめくを始初来は諸病自ら  
除た諸障自然に除滅とらるゝのでは悟せん  
譬は盲人の忽ちて眼を穿くが如きん  
此時人に乃経て路頭を揺と度な利ひに只  
おとらるゝを疾は省思して爾ち乃元氣を  
長きんまは是故にきん目力な養ふ者

は常に瞑し耳根は若くは若くは飽きん  
は若くは若くは黙とと予は白く酥は用ゐるの  
法は七つひひてや歯は白く行者定中四大  
調和せは身心ともに勞疲とら度と覺えは  
心を起して應ふは想はなとて一譬は  
色香清淨の轉轉轉印の太ひさの如き  
者頂上に頭をせん其氣味微妙ふく  
遍く頭顱の乃なうはとて後くくく



下―来くあ肩乃ひ雙臂あ乳胸膈乃る  
肺肝腸胃脊梁腰骨次第に沾は―將ら  
るる時に當て胸中のみ積六聚疝癰塊痛  
をふ隨て降下とるま水の下に注ぐとく  
歴く―と聲あり通身を周流―雙脚を  
温渥―足をたまき―仰ち止む行者再び應  
ふふ此親なるとく―故の浸く―て涸下  
とる余の條流積りて湛―て暖め蒸ひ来

臨むをの良醫の種く妙香の菜物を集め足  
を煖湯―て浴盤の中に盛て湛―てあふ臍  
輪已下を漬け蒸ひかぬ―此親なるのと  
唯心所現の故に鼻根下ち希有の香氣を  
ず―と身根俄くふ妙好の軟觸をふく身心調  
適さるる二三十歳の時め遙かに勝たり此  
時小當く積聚を消融―腸胃を調和―覺  
一に肌膚光澤を生じ若く勤めく怠くどん



べ何ほどの病を治せざらんむ何ほどの徳を成さん  
何ほどの仏を成せざらん何ほどの道を成せざらん功  
徳の速速に行人の進修乃精進に依りらく  
のと走如の忙家の時多病にしてその患ひに  
十倍しん衆聖皆慈に顧みさる小聖の百端を  
窮じしとくも救ふる人の徳さし世にふく  
上下の神祇に祈て大仏の冥助を請ひ頼み  
何の患ひをわかれん世の頼酥乃妙徳を

傳受する夏は歡喜に堪へば綿くくく精  
進とて未だ明月さるるに衆病未だ消除に  
爾來身心輕安する夏は覺ゆるのそ癡く元  
く月の大小を祀せし年の国餘を知らば念  
次第に輕微にして人衆の喜ぶものなり  
くくく馬年今歲何十累あるものもはこ  
知るに中に端ゆき若州のふ中に瀆道と  
は者大凡二十歳世人都て知る事なり



乃々願ふに<sup>あきら</sup>信し黄梁<sup>わうりやう</sup>の夢<sup>ゆめ</sup>れ<sup>い</sup>今  
 此<sup>こ</sup>中<sup>ちゆう</sup>を人のまに向<sup>むか</sup>ひ此<sup>こ</sup>枯<sup>こ</sup>朽<sup>く</sup>の一<sup>い</sup>具<sup>ぐ</sup>骨<sup>こつ</sup>を放<sup>はな</sup>  
 て太<sup>たい</sup>布<sup>ふ</sup>の單<sup>さん</sup>衣<sup>い</sup>縋<sup>すゐ</sup>に二<sup>に</sup>三<sup>さん</sup>片<sup>ぺ</sup>を掛<sup>か</sup>け嚴<sup>げん</sup>冬<sup>とう</sup>のそ  
 威<sup>い</sup>錦<sup>きん</sup>を折<sup>し</sup>くの夜<sup>よ</sup>とくく<sup>く</sup>枯<sup>こ</sup>腸<sup>ちやう</sup>と凍<sup>こ</sup>損<sup>そん</sup>とる  
 に<sup>に</sup>て<sup>て</sup>く<sup>く</sup>ば<sup>ば</sup>山<sup>さん</sup>粒<sup>りつ</sup>とぞに断<sup>た</sup>て穀<sup>こく</sup>氣<sup>き</sup>を受<sup>う</sup>けざ  
 り<sup>り</sup>未<sup>み</sup>動<sup>どう</sup>と<sup>と</sup>も<sup>も</sup>の數<sup>すう</sup>月<sup>げつ</sup>に乃<sup>すなは</sup>く<sup>く</sup>と<sup>と</sup>く<sup>く</sup>と<sup>と</sup>も終<sup>しゆう</sup>り  
 凍<sup>こ</sup>餓<sup>が</sup>の覺<sup>かく</sup>へし<sup>し</sup>あ<sup>あ</sup>た<sup>た</sup>未<sup>み</sup>の<sup>の</sup>省<sup>しやう</sup>此<sup>こ</sup>親<sup>しん</sup>の力<sup>りき</sup>らあ<sup>あ</sup>ず<sup>ず</sup>や  
 我<sup>われ</sup>今<sup>いま</sup>既<sup>すで</sup>に公<sup>こう</sup>小<sup>せう</sup>告<sup>こ</sup>る<sup>る</sup>に一<sup>いっ</sup>生<sup>しやう</sup>刻<sup>こく</sup>ひ盡<sup>つく</sup>さ<sup>さ</sup>る<sup>る</sup>底<sup>そこ</sup>の

秘<sup>ひ</sup>訣<sup>けつ</sup>な<sup>な</sup>いて<sup>て</sup>此<sup>こ</sup>外<sup>がい</sup>文<sup>ぶん</sup>に何<sup>なん</sup>な<sup>な</sup>らん<sup>らん</sup>やと<sup>と</sup>て目<sup>め</sup>を  
 収<sup>こ</sup>めて<sup>て</sup>熟<sup>じやく</sup>中<sup>ちゆう</sup>に<sup>に</sup>予<sup>よ</sup>し亦<sup>また</sup>こ<sup>こ</sup>漏<sup>ろう</sup>れ<sup>れ</sup>る<sup>る</sup>人<sup>ひと</sup>言<sup>い</sup>ん<sup>ん</sup>て<sup>て</sup>禮<sup>れい</sup>辭<sup>じ</sup>に  
 徠<sup>らい</sup>く<sup>く</sup>て洞<sup>どう</sup>に<sup>に</sup>下<sup>くだ</sup>り<sup>り</sup>て<sup>て</sup>木<sup>もく</sup>末<sup>まつ</sup>縋<sup>すゐ</sup>に<sup>に</sup>孫<sup>そん</sup>陽<sup>やう</sup>と  
 掛<sup>か</sup>く<sup>く</sup>時<sup>とき</sup>小<sup>せう</sup>履<sup>り</sup>夢<sup>む</sup>の<sup>の</sup>下<sup>くだ</sup>り<sup>り</sup>て<sup>て</sup>山<sup>さん</sup>谷<sup>こく</sup>小<sup>せう</sup>春<sup>しゆん</sup>を<sup>を</sup>入<sup>いれ</sup>  
 わ<sup>わ</sup>く<sup>く</sup>且<sup>かつ</sup>ツ<sup>ツ</sup>驚<sup>おどろ</sup>き<sup>き</sup>且<sup>かつ</sup>ツ<sup>ツ</sup>怪<sup>あや</sup>ん<sup>ん</sup>で<sup>で</sup>畏<sup>おそ</sup>れ<sup>れ</sup>て<sup>て</sup>四<sup>し</sup>顧<sup>こ</sup>する<sup>る</sup>と<sup>と</sup>  
 遙<sup>とほ</sup>かに<sup>に</sup>出<sup>で</sup>る<sup>る</sup>嚴<sup>げん</sup>窟<sup>くつ</sup>を<sup>を</sup>離<sup>はな</sup>れ<sup>れ</sup>て<sup>て</sup>自<sup>みづか</sup>ら<sup>ら</sup>送<sup>おく</sup>り<sup>り</sup>来<sup>き</sup>る<sup>る</sup>を  
 見<sup>み</sup>る<sup>る</sup>中<sup>ちゆう</sup>ち<sup>ち</sup>回<sup>くわい</sup>く<sup>く</sup>人<sup>ひと</sup>迹<sup>せき</sup>不<sup>ふ</sup>到<sup>たう</sup>の<sup>の</sup>山<sup>さん</sup>路<sup>ろ</sup>西<sup>さい</sup>東<sup>とう</sup>分<sup>ぶん</sup>ち<sup>ち</sup>難<sup>なん</sup>  
 一<sup>いっ</sup>忍<sup>にん</sup>く<sup>く</sup>帰<sup>き</sup>客<sup>かく</sup>を<sup>を</sup>悩<sup>なや</sup>せん<sup>ん</sup>を<sup>を</sup>文<sup>ぶん</sup>志<sup>し</sup>と<sup>と</sup>く<sup>く</sup>敵<sup>てき</sup>糧<sup>りやう</sup>



は導<sup>みちび</sup>んとて大<sup>く</sup>野<sup>の</sup>展<sup>ひら</sup>が着<sup>き</sup>る瘦<sup>やう</sup>鳩<sup>こう</sup>杖<sup>づゑ</sup>をひこ  
嶮<sup>けん</sup>巖<sup>がん</sup>が端<sup>は</sup>と嶮<sup>けん</sup>岨<sup>そ</sup>が階<sup>の</sup>るま<sup>り</sup>飄<sup>ひ</sup>くくして坦<sup>たん</sup>途<sup>と</sup>  
をゆくが如<sup>ごと</sup>く終<sup>は</sup>るして先<sup>せん</sup>驅<sup>く</sup>は山路<sup>さんろ</sup>遙<sup>とほ</sup>ろり  
里<sup>り</sup>許<sup>こ</sup>が下<sup>くだ</sup>て彼<sup>そ</sup>溪<sup>き</sup>水<sup>すい</sup>の亦<sup>また</sup>到<sup>いた</sup>て存<sup>ぞん</sup>ち白<sup>はく</sup>く此<sup>こ</sup>の流<sup>りゅう</sup>水<sup>すい</sup>  
に洑<sup>ふ</sup>ひ下<sup>くだ</sup>れば必<sup>かならず</sup>に白<sup>はく</sup>川の邑<sup>むら</sup>に到<sup>いた</sup>らむとて  
快<sup>くわい</sup>然<sup>ぜん</sup>として別<sup>わか</sup>れ且<sup>かつ</sup>く柴<sup>さい</sup>立<sup>た</sup>てて迷<sup>まよ</sup>り回<sup>まわ</sup>歩<sup>ある</sup>  
と目<sup>め</sup>送<sup>そう</sup>とるにそ老<sup>らう</sup>歩<sup>ほ</sup>の勇<sup>ゆう</sup>壯<sup>さう</sup>なるま<sup>り</sup>飄<sup>ひ</sup>然<sup>ぜん</sup>  
としてを<sup>を</sup>る道<sup>みち</sup>とて羽<sup>う</sup>化<sup>け</sup>して登<sup>のぼ</sup>れとる人<sup>ひと</sup>

の如<sup>ごと</sup>く且<sup>かつ</sup>つ羨<sup>うらや</sup>み且<sup>かつ</sup>教<sup>くわう</sup>に自<sup>みづか</sup>恨<sup>み</sup>むを<sup>を</sup>る終<sup>は</sup>るすそ  
此<sup>こ</sup>等の<sup>ら</sup>人<sup>ひと</sup>に随<sup>ずい</sup>迹<sup>じ</sup>とる変<sup>へん</sup>能<sup>のう</sup>いさるま<sup>り</sup>の除<sup>す</sup>くと  
して帰<sup>かへ</sup>る来<sup>き</sup>て時<sup>とき</sup>くに彼<sup>そ</sup>の内<sup>うち</sup>親<sup>しん</sup>が瀝<sup>せき</sup>修<sup>しゆ</sup>とる  
に繞<sup>う</sup>るふと年<sup>ねん</sup>にま<sup>ま</sup>とるふ従<sup>じゆ</sup>前<sup>ぜん</sup>の衆<sup>しゆ</sup>病<sup>びやう</sup>業<sup>ぎやく</sup>餌<sup>に</sup>  
を用<sup>もち</sup>ひに鍼<sup>しん</sup>灸<sup>しゆ</sup>が假<sup>かり</sup>に任<sup>にん</sup>運<sup>うん</sup>に陳<sup>ちん</sup>遣<sup>せん</sup>に特<sup>とく</sup>を  
病<sup>びやう</sup>を治<sup>ちやう</sup>とるのふあ<sup>あ</sup>に従<sup>じゆ</sup>前<sup>ぜん</sup>の御<sup>ご</sup>が扶<sup>そ</sup>む  
ち<sup>ち</sup>の<sup>の</sup>と齒<sup>し</sup>牙<sup>が</sup>が下<sup>くだ</sup>とま<sup>ま</sup>は<sup>は</sup>る底<sup>てい</sup>乃<sup>すなは</sup>ち難<sup>なん</sup>信<sup>しん</sup>  
難<sup>なん</sup>透<sup>てう</sup>難<sup>なん</sup>解<sup>かい</sup>難<sup>なん</sup>入<sup>に</sup>底<sup>てい</sup>の一<sup>ひと</sup>着<sup>き</sup>子<sup>こ</sup>根<sup>こん</sup>に透<sup>てう</sup>る底<sup>てい</sup>



に徹して透りこして大執喜なる者大凡  
 六七回之餘の小悟悦踊舞なる者數に  
 志に妙喜の謂ゆる大悟十八度小悟數に  
 知るに初て知る寔に永に歇るざるを古  
 一二三回の禪と着くといふも足を常に  
 氷雪の底に浸るが如くする者今既に三冬  
 歳をこの日と云へども禪せに懈せに馬齒既小  
 古稀に近づくといふも括るるはも點の小

病も悔るるは彼の神術の餘動あるらん  
 ちの憂ふるは喆林も死の殘喘多しを義我  
 荒唐の妄執を記取していて佗の上流を証惑  
 ごとく是宿とに靈骨有て一槌に既に成とる  
 底の俊流のわゆる殺るるにあはに癡鈍なり  
 必く骨病予に類ひとる底看續して子細小  
 觀察せむ必に少くは補ひあるらん其の別  
 人のもの拍して大笑せん未と何れ故を馬枯



石舟閑言

其公咬人<sup>く</sup>を午枕<sup>こしん</sup>に喧<sup>けん</sup>びと

惟時

審曆<sup>しん</sup>丁丑孟正二十五日

京都寺町通六角下町

小川源兵衛刊行



神田猿蓑町壹丁目拾番地  
三河屋幸三郎

禪家書林

柳枝軒 小川多九衛門刻

京師六角通寺町西<sup>し</sup>入町



